

カワラヒワ の死に想う

野鳥との出会いは多くの場合突然やってくる。そして、人の心にいろいろな思いを残して去っていく。時として心の奥深くに跡を残して。

それは昨年の夏のある日のことであった。

「ブブー」玄関のブザーが鳴り、一人の少年が立っていた。「どうしたんだい。」

少年は黙って手を差し出した。見るとカワラヒワの子がぐったりとその手の中でうずくまっている。

「どうしたんだい。」

少年は元気なくうなだれている。小鳥を手にとってみると胃袋がペッチャンコだ。

「餌を食べないんだね。」

少年は軽くうなずいた。

二日前に道端にいたのをつかまえてきたが、いっこうに餌を食べない。前にスズメの餌付けをしてももらったことを思い出して来たのだが、昨日は留守だったということだ。

すぐに餌付けにかかった。

二日も餌を食べていないとなると絶望的だ。はたして、なかなか口を開けようとしないう餌を口の中に入れても、物憂そうな目をするだけで、飲み込む気力がないようだ。

一時間程たったろうか。やっと餌を口の奥に押し込むとヒワはそれを飲み込んだ。ヒ

ワは静かに目を閉じた。しばらくすると、おもむろに首を横にひねり、僕の顔をじっと見つめた。そして突然首をぐいっと空に向けると「ピリピリ、ピリピリ、ピリピリ、ピリピリ、ピリピリ」あの鈴をころがすような声で力いっぱいの声で鳴くと静かに首をたれ動かなくなった。

それは、ほんの一瞬の出来事であった。その時、何が起きたのかすぐには理解できなかったけれど、今、この手のひらに残るぬくもりを感じ、その光景を思いうかべる時、空に向かって全生命を燃え尽くすようにして鳴いたヒワの声がよみがえってくる。それは命とはどんなに力強くすばらしいものであるかを、示して

くれたような気がする。たとえどんなに小さな体にやどった命であろうとも。

人は窓辺にさえずるスズメの一羽一羽にも、校庭で餌をついばむドバドの一羽一羽にも、この命のあることを忘れてはならないのだ。人間の力が弱かった昔、人々は自然との戦いの中でじかに自然と接し、自然と多くの出会いを持ったにちがいない。しかし、人間の力が強大になり、巨大な機械が導入されるようになった今、人間と自然との出会いは極度に少なくなった。やがて、人々は自然というものに命のあることを忘れ、命のあることを知らなくなっていくような気がする。ただイミテーションでのみ自然を知る

ように。映像でのみ野鳥を見るように。そして、それ故にまた何のちゅうちよもなしに自然は破壊されていく。

人間はより良い生活を求めて自然と戦ってきた。しかし人間の力がこれ程大きくなつた今、改めて、より良い生活とは何かということを考えてみてもよいのではないか。ただ自分の環境を変えることだけがより良い生活を求める方法ではないはずだ。自分自身を環境にあわせていくこともできるはずである。そして、自然をできるだけ自然のままにそっとしておきたい。自然を友として生きていきたい。カワラヒワの死を考えながら想う。

(物理科教諭・馬目秀夫)